



◆到着順◆

坂口 伊都 新連載第二回

2回目の連載です。悩みながら、書き上げたという感覚でいます。まだ、養育里親として子どもを預かる予定もなく、焦っても仕方がないのですが、モヤモヤとしてすっきりしない感じがしています。まあ、待つしかないのですけど。

気分を変えましょう。最近、楽しかったのは自主家族事例検討会の仲間でスペイン料理を食べに行った事です。メンバーは、歌うソーシャルワーカー、踊る相談員、五足のわらじ会社員、英語堪能カウンセラー、泳ぐ事務員、つぶやき上手なスクールソーシャルワーカー、犬大好きパイオニア研究員と個性派ぞろいの30代から50代です。

事例検討会では、全員揃わないのですが、こういう企画では何故かそろう私達。このメンバーが全員そろったのは初めてだったりします。小さな自主「かじけん」ですが、いろいろな立場の人達と交わるのもいいものですね。

古川 秀明

今月から日曜寺子屋家族塾の第三期塾生の募集に入ります。回を重ねるごとに講師の教える力量が上ってきているのが実感できます。

前回告知させていただいた、8月3日の

講演会もおかげさまで無事終了することができました。

ドライアイスを使った日曜寺子屋公開授業も好評でした。

私の講演会は親子での参加者が多く、講演の後に学習関連のグッズを買って帰る家族を見ると、微力ながら「学ぶ楽しさ」を家族に提供できているのかなと思います。

今後毎日曜寺子屋家族塾の取り組みは続けます。まだまだ試行錯誤の連続ですが、ご指導やご意見を頂ければ幸いです。

浅野 貴博 新連載第二回

京都での、博士論文のための調査も無事終わり、蒸し暑い京都から脱出し、私の郷里である福島県の会津にしばらく帰省していました。

NHKの大河ドラマ「八重の桜」のおかげで、震災と原発事故の影響で途絶えていた観光客もずいぶん戻ってきているようです。「八重の桜」にちなんでお菓子やグッズをあちらこちらで目にする、うれしい反面、このブームが去った後のことを、ふと考えてしまいます。引き続き、多くの人に関心を持って、足を運んでくれることを願わずにはいられません。

一時帰国してから、欠かさずに「八重の桜」を見えています。これまでの多くの幕末ドラマの中で、長州側からの視点で美化されていたようなエピソードについて(例えば、'錦の御旗'の経緯など)、史実に基づき客観的に描こうという強い意志が感じられ、会津人として、毎回目頭が熱くなっています。戊辰戦争時の白虎隊に代表されるような悲劇性を必要以上にクローズアップせず、丁寧に、そして淡々と描くことで、'賊軍'という汚名を着せられることになった会津藩の無念の想いが薄れることなく伝わったのではと思います。

1928年、旧会津藩主松平容保公の孫にあたる勢津子さまが、昭和天皇の弟・秩父宮雍仁親王の妃殿下になられたことが、会津人にとっていかに意義深く、重要な出来事であったか、ドラマ前半で丁寧に描かれた様々なエピソードによって、視聴者

に深く理解して頂けるのではと期待しています。

岡田 隆介

わたしの選択

人は、常にいくつもの選択肢の中から最適と思われるものを選び(そう信じて)行動に移します。生きることは選択と決断の連続であり、いままその線上を歩いています。現在の立ち位置は無数の選択の連なりだから、「もしあのとき～していたら」なんて、一つの切片を切り取ってゴチャゴチャ言ってるに過ぎません。

なんてことを思いながら。”昭和52年春、もしも広島市中心身障害児福祉センター(当時はそう呼ばれていた)への赴任を断っていたら”と夢想します。家族、友人、仕事仲間のだれとも交わらないパラレルワールドに住んでいて..。「で、どうなの? そっち側に飛んでもいいけど、ユー、行っちゃう?」「いやいや、めっそもない」。

さて、半年後にはおよそ40年ぶりに選択と決断の日が来ます。もうどんな選択をしたところでパラレルワールドはないでしょう。ということで、思いっきり楽しんでみます、ファイナル・ファンタジーを!

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、府教委認定フリースクール「知誠館」

(<http://tiseikan.com>) 代表。

ふと気がつけば、もう14回目の投稿ですね。さてこの夏、我が家では大学3回生の娘がアメリカの大学へ短期留学。高3になる下の娘は受験前の勉強合宿。そのすきに、妻と私は以前から行ってみたかったタイのチェンマイ、スコータイへ。ゆったりとした時間が流れる中、久しぶりにほっこりとした気分になることができました。そしてもちろん下の娘が合宿から帰る日に、関空へと滑り込むように戻ってきたのです。

河岸 由里子

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

先日生まれて初めてゲジゲジ(正式名はゲジ)を見た。家の中に得体のしれない、気味の悪い虫がいて、大急ぎでつぶした。なんという虫なのか分からなかったのでネットで調べたところ、ゲジだと分かった。しかも4cmほどあったのでオオゲジなのだと思う。ゲジゲジという名前も知っていたし、ゲジゲジ眉などと言う言葉もあってきっとモジャモジャの生き物なのだろうと思っていた。ムカデやヤスデ、毛虫、ワラジムシ、一般に気持ち悪がられる虫は一杯見て来たけどゲジが一番気持ち悪いと思った。なんといっても足の長さが不揃いなのが許せない。長い所と短めの所とがあるのだ。しかも肉食で、飛んでいる我にとびかかって食べるとか。多足の昆虫は蜘蛛までは許せるが、それ以上の多足には出来れば会いたくない。例外として6本足だがゴキブリは嫌だ。ゲジはゴキブリの天敵だそう。北海道では殆どゴキブリを見かけないのでゲジがいても嬉しくない。60年近く生きてきて、ゲジゲジに出会わなかったことの方が不思議なのかもしれないが、まだまだ初めての事に会えるとは幸せなのかもしれない。

國友 万裕

来年の2月で50歳になります。いよいよ人生の秋です。

今年もお盆は故郷には帰りませんでした。母や弟とはしょっちゅう電話で話していますし、この頃は、Facebookがあるので、僕がアップした写真を見て、「まあ元気でやっているみたいね。友達もたくさんいて……」と母は安心しているみたいです。母は、これまでずっと僕の不登校のトラウマと闘ってくれました。だから誰よりも僕を理解しています。僕が決して努力をしなかったわけではなく、不登校になってから35年近く、普通の人が生きていいような苦しみをたくさん味わったということ……。不登校という言葉もない頃に不登校になり、不登校を治す処方箋なんて何もない時代に、もがき苦しみ、どうにか非常勤講師とはいえ、自分で生活できるようになるまでには、並々ならぬ苦労があったということ……。そして、今でもPTSDに苦し

み、トラウマをどこに置いたらいいのかわからずに苦しんでいるということ……。

「世の中には外国で子供が暮らしている人だって、たくさんいるから、あなたが一生、帰ってこなかったとしても、あなたが元気ならいいと思っているから」と母は言ってくれます。僕が不登校になったのは、おそらく誰が悪いからでもない、運命のせいです。それがわかっている、僕は未だに自分を許すことができません。自分を許せないことは苦しいこと、自分を愛せないことはつらいことです。

僕は、故郷を憎むことで、どうにか自分の気持ちに折り合いをつけようとしています。もう故郷には帰らない。親不孝のうえないのだけど、僕のトラウマは、僕が一人で責任を負えるほど軽いものではなかった。結局、悪いのは故郷の風土だと故郷に責任転嫁するしかないのです。男が責任転嫁するのはみっともない!? いや、してもいいですよ。だって、俺は、35年も苦しんだんだから……。



思春期の女の子が、DVやセクハラで、心が壊れたとしたら、世間は皆同情の目で見てくれる。しかし、男子が男性差別で心が壊れても、誰も同情はしてくれない。今はしてくれるのかもしれないけど、あの頃はしてくれなかった。15歳で、心が壊れてしまった僕は、35年たった今でも、リハビリ中の身なのです。

憎むことは悲しいこと。偏見をもつことも悲しいこと。しかし、それをよすがに生きることでできない人だって、世の中には存在するんです。切ないですね。

この頃凹みモード。今回はちょっと重い話になってしまいました(笑)。

岡崎 正明

お盆休み。友人と昼食に行くことに。「何食べる?」「何でも」「近くにハンバーグ屋ができてたけど」ハンバーグかあ…。微妙な表情をしていると、友人が「あそこの蕎麦にする?」と変更案。「それだ!」胃がうなずいた気がした。

すでに時間は2時前。店に連絡すると「ラストオーダー2時半です」。

うちから蕎麦屋まで車で飛ばして25~30分。間に合うか?かなりきわどいぞ。

迷っている暇はない。とりあえず店に車を走らせる。友人の運転もいつもより荒々しい。気持は分かるが事故だけはやめてくれ。「蕎麦食いたさの暴走」新聞の見出しが脳裏をよぎる。笑えない。

「間に合うか?」「この時間は道も混んでないし」「素早く安全運転でな」「万が一ダメだったら?」「あの先にスリランカカレーの店があったら」「あそこも悪くないな」

すでに蕎麦のつもりで待機している胃に、「ひょっとしたらカレー」と言い聞かせる。だが相反する2つの味の準備は中々難しい。気付いたらカレー南蛮蕎麦のことを考えていた。

そうこうしてる間に残り10分。「おい、近道こっちだろ!」「しまった」まさかのタイムロス。胃の中は俄然スリランカ色を帯び始めた。しかしそれと反比例するように蕎麦への未練がこみ上げる。

残り3分。「こりゃアカンかな。まだ距離が少しあるぞ」「ダメかあ…」友人もカレーやむなしの雰囲気。蕎麦は土俵際。スリランカで腹をくろう。そう思った瞬間。まさかの展開。「これでカレー屋も閉まってたりして…」車内も胃内も大混乱。

「スリランカ人に盆休みはないやろ」「でも仏教徒じゃ?」「…そもそも本当にスリランカ人も分かん」「ぼちぼち屋休憩とか」「カレー屋は普通3時までやるやろ」「他にあの辺店あるか?」「最悪このうどん屋かなあ…」憶測と妄想。希望と絶望の会話が飛び交う。胃の準備は、もはやあきらめた。

最後の信号。ここを曲がれば蕎麦屋まであと数百m。カレー屋なら直進だ。車の

時計は2時33分。この時計は合っているのか？いやむしろ蕎麦屋の時計は？

「ダメもとで行ってみるか」友人のひと言が私たちの運命を決めた。数十秒後、蕎麦屋が見えた。まだ暖簾がかかっている。落ち着けと言いつつ、店に飛び込む。

「まだいけます？」「いらっしやいませ、どうぞ〜」

どこでも聞く店員のかげ声が、天使のささやきに聞こえた。店の時計は2時35分を過ぎていた。

三野 宏治

関西を離れて3回目の盆休みでした。昔は「行くつもりがあれば、どこにでも行ける。会うつもりがあればいつでも会える。行けない、会えないのは自分にその気がないからだ」と思っていました。そして盆暮れ正月の帰省ラッシュをニュースで見るにつけ「なにも混む時期に帰省しなくてもいいのに」と感じていました。

結婚して子どもが生まれて故郷を離れた今、そうではないことを身をもって感じています。行きたくても行けなかったり、会いたくても、そう上手く都合がつかなかったり。そんなことの連続で生活が成り立っている。だから、都合のつく盆暮れ正月に帰るのだと。こんなことを今更ながら理解しています。

今、「何故、混む時期に帰省するのか？」と問われれば、「混んでいても、どうであつても帰省したいから帰るのだ」と答えます。

中村 正

寺山修司が好きなので関連するイベントや演劇があれば可能な限りでかけている。特に今年は寺山修司没後30年なので、かつてないほどのイベントがある(大半は東京で開催されるので残念であるが)。47歳で亡くなった1983年、私は大学院生で研究室の友人たちと寺山論に花を咲かせた記憶がある。

この夏は東京で仕事があるたびにいろんな企画にかけた。ワタリウム美術館(東京・青山)という現代アート美術館では「寺山修司展 ノック」があった。「ノック」は、

1975年4月19日、東京阿佐ヶ谷で行なわれた30時間の市街劇のこと。「あなたの平穩無事とは一体何なのか？」と問い、地域の玄関の扉を突然ノックしていったという。「かつて、私は、『街は大なる開かれた書物である』と書いた。しかし今ならばこう書き直すことだろう。『街は、今すぐ劇場になりたがっている。さあ、台本を捨てよ、街へ出よう』と」という言葉とおりのことが行われた様子が見事に展示されていた(寺山修司『朝日新聞』1975年5月7日)。そして楽しみにしていたのは演劇実験室◎万有引力による「邪門」の上演である。なかなかこの題目が演じられる機会がなかったのでわくわくしながら観た。黒衣が主役で役者はそれに操られている。黒衣からの解放が役者の課題でもあるのだが、その黒衣を操る大きな黒衣が登場する。それは<言葉>だとされ、その<言葉>に操られたこんな芝居はもう止めた！といながら舞台が解体されていく。その時点で役者は黒衣から解放されることとなる。しかしその解放を語る<言葉>自体がすでにつくられたものでしかない。<言葉>という大きな黒衣によってコントロールされていることになる。ではいったい自由とは何であるのかという大きな問いを投げかける。役者は勝手に舞台から降りて三々五々解散となる。客はおどおどして何がなんだかわからなくなる。私にはこの混乱は心地よい。



さらに、元・天井棧敷の昭和精吾による「71歳・俺の寺山修司と天井棧敷」と題した語りパフォーマンスも間近にいた人からの記憶をもとにした一人芝居として楽しめた。

そしてもうひとつ。9月になったら青森県三沢市にある寺山修司記念館、そしてむつ市にある恐山にいく予定だ。今年で三年連続となる。私にとってのパワースポットである。ますます時代は亡くなって30年になる寺山修司を必要としているようにも思えてくる。

そして関連する話題をもうひとつ。マガジン編集長の団さんの勧めもあり読んでみたのは『クレイジー・ライク・アメリカー心の病はいかに輸出されたか』(イーサン・ウォッターズ著、紀伊國屋書店、2013年)という書物。The Globalization of the American Psycheという英語のサブタイトルが内容をよく伝えていると思う。面白かった。アメリカ産の心の病がトラウマ論や何とか療法や新薬とともに世界を支配している様子が描かれている。日本もかなりの分量を割いて巨大な「うつ病マーケティング社会」として登場する。

ちょうどその時、朝日新聞の「(インタビュー)新・遠野物語一文芸評論家・東雅夫さん」という記事が目にとまった(2013年8月8日朝刊)。偶然だが別件のメールでスイスのアルプスにいるという同僚の村本邦子さんからこの記事読んだかと連絡があった。これは怪談文学に精通している東さんの取り組みの紹介で、東北の震災怪談の話である。『遠野物語』の現代版だという。死んだはずのひとたちと会ったり話をしたという体験が今、被災地の随所にあるのだという。それを集めているという。同じ話をNHKスペシャルが特集していた。2013年8月24日放送の「亡き人が現れた・・・被災地で語られる不思議体験」だ。死者が生者を元気づける。忘れはしない記憶がある。時間とともに、文化とともに、あの世とともに、そして死者とともにケアや癒しがある。「震災体験」としてひとりひとりの物語となっていく。お盆だからというものもあるが、死者の存在は文化の陰翳や感情の深奥や自然の驚異を形成するので心を語る際には欠かせない。もちろん土俗や地域のなかには人を共同へと抑圧する要素もあることを認めた上でもなお、土と地の文化は面白いと思う。決して輸

入できない。寺山修司もまた東北の文化に深く根ざしたアートを創った人である。

しばらくは実に表面的な「心の時代」なるものが続くのだろうけれども、地道にこつこつとこのマガジンはそうしたなかでは面白い機能を果たしていけるのだと思う。確実に自分の言葉や体験をもとに語ろうとする支援と臨床が執筆者の文章から読み取れるからだ。(2013年8月25日記)

浅田 英輔

学校の先生と、ケースの子どもについて話をした。いろいろと問題行動がある子なのだが、その先生、「この子はフツウになりますか？」と。「フツウになる」という言葉にはいろいろな意味が込められていると思う。「フツウに高校行けますか」「フツウに仕事ができますか」「フツウに結婚できますか」その中で全員の了解を得られるのは「普通高校に行けるかどうか」くらいであろう(そういう意味でもない!)。「フツウ」という言葉を使うとき、我々は思考停止しているのではないか。「フツウの仕事」ってなんぞや? 「フツウの結婚」ってなんですかね? 学生時代、成績もよくてスポーツもできて、でも仕事に就いてない人とか、結婚に失敗(この言葉も怪しいが)している人も「フツウに」いるだろう。そのうまいかなさ加減が不幸だという人もいるだろうし、「離婚してほんとさっぱりした!」という人だっているだろう。仕事している不幸な人も、結婚して不幸な人も「フツウ」に在る。「フツウ」という言葉が出てしまったときは、「そこで考えを止めずに、もうちょっと考えてみなよ?」と自分が自分に問いかけているのだと思うことにする。

鶴谷 圭一

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール: osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター: haramachikinder

8月2日、NHK あさいチという番組のディレクターさんから電話が入った。

「ライフジャケットのことで来週でも取材したい」という内容。

最初は話がかみ合わなかった。「夏休みなので、園には誰もいないだろうから取

材に協力してくれる保護者を紹介してほしい」と言うことだったが、最近の幼稚園は、たいてい預かり保育を実施しているので夏休みもオープンだ。僕らにとっては当たり前のことだけど、子どもがいない人には幼稚園の最近の実情なんてその人の幼児時代から進んでいないんだ、と感じた。

そして取材当日、ディレクター、アナウンサー、カメラ、音声さんの4人がドライバーさんが運転するワゴン車で来園された。ディレクターさんの指示に従ってアナウンサーと出会うシーンから撮る。その後協力してくれた園児10人が模擬避難訓練をして、ライフジャケットでの練習シーンまで、子どもや保護者のインタビューも含めてみっちり3時間撮影して終了した。

放映日は22日「あさいチ」の冒頭で防災用具の紹介コーナー10分の予定…おお、出てきた出てきた! と思ったら、イチローの4000本安打の臨時ニュースが飛び込む! ここで3分時間をとられて3時間の取材が3分の放映で終わった。テレビってねえ、タイヘンですねえ! 僕らよりも一生懸命準備したディレクターさんの気持ちやいかに…ご苦労様です。

さすがに全国放送なので、たった3分でも知り合いから「見たよ」連絡が来た。いちばん驚いたのは、30年以上も前の高校の同級生から「もしや同級生の鶴谷さん?」のメールが来たことだ。

千葉 晃央

ミニ連載:

■私がしている文章の書き方 3 ■

この短信では私がしている文章の書き方はどんな手順なのかをまとめてみる試みをしています。自分への確認のために始めました。

大きな6 手順

- ①箇条書きでいいことをかく
- ②丁寧に膨らませて文章にする
- ③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える
- ④接続詞等、つながるように加筆⑤「です」「ます」、「である」の判断
- ⑥音読で確認
- ⑦黙読でも確認

今回は「③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える」

手順③をいったんプリントアウトします。そして読み返します。パソコンの画面でみつからなかった訂正ポイントが結構見つかります。これはパソコンという画面と紙面という媒体の違いによるものが大きいと思います。パソコンの画面ではどうしても見落としがでます。

読んでいると前後を入れ替えた方がいいことに気が付くことも多いです。ばらばらになっていた、似たような内容も見つかります。ですので、テーマごとにプリントアウトしたものをはさみで切っていきます。そして、カテゴライズするのです。そして、その塊ごとに文章の構成の中でどれを最初に持ってきて、これを最後に持ってきて等考えていきます。(続く)

大川 聡子

連載4回目です。今回から、本文中にメールアドレスを表記することにしました。マガジンを通じてか、最近になって私の論文をお読みいただき、連絡をいただいた方が何人かいらっしゃいます。ですが、私は1年の半分は実習に出ていて、他にも講義や出張などで研究室にいないことが結構多く、電話ではとても連絡がつきにくい



のが現状です。また、私が博論で著書を何冊も引用させていただいた先生(所属大学が同じ)に「* *さんから、大川先生を紹介していただきたいと連絡をもらいましたが、いかがでしょうか?」とメールで

ご連絡をいただき、非常に恐縮したこともあり、ありがとうございました。こうしたこともあって、興味を持っていただいた方が直接ご連絡いただけるように、アドレスを書かせていただいた次第です。

前号の編集後記で編集長が書かれていたように、マガジンで研究を発信する場を与えていただいたことが、人との新しい出会いにつながっていくのかなと思ひ、ちょっとワクワクしています。

本編では、今回から10代の母親の語りメインになります。ご意見・ご感想をお待ちしています。

大谷 多加志

足腰の鍛錬をしています。5月にソフトボールの試合をしたら翌日から歩けなくなるほどの筋肉痛になったので、運動不足を解消すべくランニングを始めました。週に1回のペースで10回目まで継続中。マガジンの連載とともに、続けていきたい習慣になりました。

また、ちょっとしたきっかけから、連載のテーマである「発達検査」の原典を読むことになりました。この仕事をするからには読んでおきたいと以前から思いながら、「また手が空いたら・・・」と言い訳ばかりで読めていなかった。これも私にとっては足腰の鍛錬です。ふと、いいタイミングできっかけが訪れる今年。きつといい流れがあるんだろうと思う。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

かつて、ある所で墓場によく行きました。ある人に注意を受けました。殴られるかもしれないよ、と。その社会では、悲しみの表現にそのようなこともあるのだと知りました。■感情とその表現は一様ではありません。日本の社会で、キスやハグが受け入れられるようになったのは最近のことだと思います。今でも、都会と田舎ではこうした愛情表現の受け入れ度は異なるでしょう。感情の表現方法は他者の表現を見て覚えることも多いと思います。■最近、お葬式に会葬する人が減りました。人の悲しみに会う前に、いきなり自分に悲しみ

が訪れたと言うこともあります。お葬式と言う「儀式」でどのように身を置いていいかわからない人を見かけることもあります。悲しみを表現出来ない人が増えていきます。

川崎 二三彦

連れ合いを接待する？

退職を前に「有り余っている有給休暇を少しは使いたいな」という連れあいの希望を満たすため、今年2月に宮崎旅行に出かけたことは前の前の号で報告した。これで何とか義務を果たしたと思っていたら、そうは問屋が卸さない。

「退職記念の慰労旅行に行きたいわ」などと言いつつ、今年5月、ベトナム旅行を敢行したことも、前号で紹介した。

さて7月。私の所属している全国児童相談研究会が新潟で小セミナーを開くというので出かけることにしたのだが、せっかくの新潟である。少し足を伸ばして佐渡に行くのも悪くないと思った。

「7月に佐渡へ行こうと思うが、どや」「行く、行く」

詳しい日程も聞かずに二つ返事で話が決まってしまうのは、やはり退職した身の強みだろう。

それはさておき、佐渡に行く気になったのは、是非とも訪ねたいところがあったからだ。ご存じの方も多だろうが、佐渡は、彼の安寿と厨子王の母が人身売買によって売られた地なのである。

「どうもあなたは、安寿と厨子王にえらくご執心ですな」

という声が聞こえそうだが、もちろんそれについては理由がある。嘘と思うなら、厚生省児童局編「児童福祉十年の歩み」(1959年11月発行)を開いてもらいたい。そこにこんなことが書いてある。

「鎌倉時代であるが、この時代には山椒大夫の説話や室町の謡曲などにもみえていのように子女の人身売買が行われたようである。その発生原因は、平家の残党のような捕虜からであるものもあつたが、多くは貧困に原因しており、とくに寛喜二、三年の大飢饉はこれを促進したもの

と思われる。幕府はしばしば禁令を発し、これを犯す者は厳刑に処したが、止むことがなかった。



児童福祉に携わる者として、山椒大夫は、つまり安寿と厨子王の悲話は、必ずや知っておくべき歴史の一幕なのである。

ところで、一夜漬けの調査によれば、佐渡には安寿塚が少なくとも2か所ある。そこで、佐渡到着初日、最初に向かったのが、佐渡市畑野。森鷗外の「山椒大夫」の結末と違って、この地は生きて母と再会した安寿姫が、京へと帰る途中に亡くなった場所とされていた。もちろん観光客など一人もいなかったが、誰の手によるものか、祠は丁寧に祭られていた。

翌日は、安寿の母が騙され、連れて行かれたという鹿の浦を訪ねることにした。ただし、畑野で目的地を探すのに苦労したので、この日はあらかじめ所轄の警察署で道案内をお願いした。

「あのう、ここへ行きたいんですが…」

「ええっ、安寿塚ですか??」



どうだろう、勤務中の警官誰も安寿塚そのものをよく知らず、総出でPCや道路地図

を調べてくれたのであった。結果、最後は無事に目標地点を地図上に発見、非常に親切な案内をしてくれたのは、大助かりであった。なお、到着してみると、県道45号線には大きな標識がありました(w)。

*

というようなわけで、佐渡旅行は目的を果たした上に、トキを観て佐渡金山跡地も回り、おまけに土産物店で働くジェンキンズさんの後ろ姿もちらと見て無事終了した。のはよかったとして、前号で私はこんなことを書いた。

「今回の旅行(注:ベトナム旅行)が宮崎旅行と違ったのは、帰国後、連れあいが京都に戻らず、そのまま何日か、横浜で単身赴任している私のアパートに滞在したことだ。何かと助かることは多かったのだけれど、部屋が狭くて居場所がない、見なくていいところを覗いている、等々の不都合さがそこかしこに出現する」

今回も全く同じ事態が出来するが、問題は連れ合いがいつまで滞留する気なのかということだ。こっちは一応仕事があるのだし、知り合いの誰一人としていない狭苦しいアパートに居てはさぞかしつまらぬだろうと、お節介ながら考えてしまう。

「佐渡から戻った後、福島県の郡山で仕事があるんだけどな」

うかつにも口を滑らせたために急遽決まったのは、その日の仕事を終えたら、横浜と郡山の中間地点、宇都宮で合流し、鬼怒川温泉に一泊するプランである。もちろん、費用はこっち持ち。



温泉でくつろぎ、6年かかるという修復工事直前の日光東照宮をぎりぎりセーフで見学、前日の雨で流量を増した華厳の滝も満喫した。

「アンタみたいに、一週間のうちに2か所も温泉旅行する者はいないぜ」

「シアワセやろ」

などと、暗に感謝を強要してはみたものの、意に介する様子は見られない。最後はどこへ行く当てもなくなり、苦肉の策として横浜市内某映画館で宮崎駿「風立ちぬ」を観る。

かくして、どうにかこうにか接待も終わり、連れ合いは晴れて京都へ戻っていったのであった。(2013/08/25記)

中村 周平

私事で恐縮ですが、7月初旬に関東の大学でお話をさせていただく機会がありました。以前、立命館大学の障害学生支援室におられた職員の方に声を掛けていただいたことがきっかけでした。

個人的に大変尊敬する方からでしたので、嬉しさと同じくらいプレッシャーが掛かり…。しかし、学生スタッフの方、職員の方と一緒に、最後までやり遂げることができました。

京都に帰った後、声を掛けていただいた職員の方からメールをいただきました。その最後には、「一緒に仕事ができてよかった」と。言葉にできない嬉しさがこみ上げてきました。

荒木 晃子

<なぜ?> 2012年度全国の児童相談所で保護した新生児650人のうち、541人(83%)が乳児院に委託され、95人(15%)は里親委託であったという(読売新聞2013.8.25)。この結果は、里親委託ガイドライン概要(2011年厚生労働省)にある「里親委託優先の原則」が反映された数字とは考えにくい。当然ながら、里親となるには様々な手続きや研修を経て、その適性や家族関係が考慮されてしかるべきであろう。選別するためには時間も必要だ。しかし、里親委託優先の原則に伴い、その判定基準や職員の意識にも変化はあるのだろうか。ルールが変わっても、人が人を選別する際の意識変化は不可欠である。一説に、「人間の心理発達段階をみると、誕生から3歳までの3年間は、人格

形成にとって最も大切な時期。生後六ヶ月を過ぎる頃から始まるという人見知り、まさに愛着が形成され始めたことを意味する。この生後六ヶ月から一歳半くらいまでが、愛着形成にとってもっとも重要な時期である。「臨界期」とよばれるこの時期に、母親の不在や交替があったとき、愛着の傷を受けやすくなり、後の対人関係や社会性の発達に影響が及ぶ危険性が生じる。この臨界期を過ぎると愛着形成は難しい」という発達心理学情報もあることから、うへの調査結果に「なんだかな〜」という感が私にはある。むろん、人間は百人百様。乳幼児といえど、ひとりひとりの個性は光る。なので、みな一様に、人の発達とは、愛着とはを語れるわけではないことも理解している。でも、やはり、なんだかな〜、なのである。理由は、私の不妊当事者性にある。知り合いにも、また、クライアントさんのなかにも、今この瞬間にも、(登録を済ませ)里子/養子を迎えたい



カップルがたくさん存在する。彼らはずっと以前から、子どものいる家庭づくりを目標に力を合わせて頑張ってきた人たちだ。「いつかきっと、わたしたちも子どもを迎えることができる」と希望を持ちつつ、いまかいまかとその連絡を待っているのだ。想像するに、その数は上の調査で浮かび上がった乳児院へ委託された新生児数を大幅に上回るに違いない。でも、なぜ彼らは出会わないのだろう。施設に委託された多くの新生児たちと、その子たちを迎えたい沢山の不妊カップル。国政は、里親委託優先の原則の方針として打ち出した。

導線の端と端は見えた。その方向性も決まった。無いのは、その導線を作りそれを支える仕組みだ。家庭を必要とする子どもたちと、子どもを迎えたいカップルをつなぐネットワークを、いつか日本中に張り巡らせたい。新たな情報を目にするたび、かつて、ささやかな夢と胸に秘めていた思いは確信に変わり、いま、大きな希望に育ちつつある。

尾上 明代

数日前、テレビのチャンネルをランダムに変えて見ていたとき、ハッとしてリモコンを動かす手が止まりました。

画面には、お伽噺や神話の場面を描いた絵が次々と映し出され、その説明をする人の声が流れていたのですが、それが自分の声だったのです。ほどなくして話し手の顔が映りました。やはり私でした。正確に言うと、約30年前の私です。私は昔、アナウンサーとして、放送の仕事をしていました。その一番最初の仕事が、放送大学のテレビ番組「記号と人間」というシリーズの聞き手でした。それが放映されていたのです。講師は、哲学者の吉田夏彦先生(東京工業大学名誉教授)。なぜこんなに古い番組が放送されているのか・・・と思いながら、懐かしく見ていたら、「もう一度見たいあの名講義」という番組枠だったことが後でわかりました。

思いがけない形で昔の自分に会えました。そのおかげで、あれから後の年月を振り返り、いろいろな出来事がギッシリつまった日々を送ってきたことをしみじみ感じることができました。



木村 晃子

この5月から、介護に関する地元の業界紙に連載をしている。ケアマネとして、利用者の想いをどのように紡ぎ支援していくか、ということを実践事例を通して伝えていく。これは、主にコミュニティとのつながりをどのように再生していくか、という視点からの内容が主だ。文字数にして、およそ2500字程度。けれども、週刊という性質上、毎週締切に追われている。

作家になるのが夢なので、締切に追われるのは願ってもないことだ。そちらの連載は既に16回まで書き上げているが、よく書くことがあるなど感心している。とにかく、自分の実践を等身大で伝える機会を与えていただき感謝なことだ。このマガジンの本編を入稿して、次にまた週刊ものの締切が迫っている。好きなことをできる喜びをかみしめながら、「ネタ探し」な毎日を送っています。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

藤 信子

「経験したことのない猛暑」の今年だけれど、このフレーズはよくわからない。たとえば来年京都市で最高気温だった今年の気温に1度低いと「経験したことのない」とは言わないけれど、すごく暑いことは確かだろうから、どう言うのだろうか？などぼんやり考えている。いろいろ考えがまとまらなくても、「暑いので」ということにしている。これは案外良いことかもしれず、とかく天候などに逆らわずにできることしかしない、ということは私には向いた生き方のようだ。天候など持ち出さなくても、もともとそうだったじゃないか、と言われるかも知れないが、本当にこの天候には少し参っている。数日前に夏休みが終わったので、今は楽しみがなくなった状態。これはプロフィールではないと今頃気が付いた。

今年の夏休みは、急いで書かなければならない原稿がなかったため、久しぶりにゆっくり本が読めた。それが終わったのが悔しい、という気分の現在です。

水野 スウ

みーんみーん、じーじー、スイッチョスイッチョ、じじじー、オーシーツクツク、といった虫たち大合唱団をBGMに過ごしています。これが“沈黙の夏”になっちゃったからそれこそエライことだもんね、と自分にいいかせ、汗をかきかき(クーラー無し、庭森の緑のエアコンにおおいに救われながら)、夕方になって風が一瞬涼しくなり、同時にヒグラシのカナカナカナカナ、、、が聴こえてくるとほっとする、夏の日々です。

ただこのところ、きもちは何だかざわざわ、おちつきません。首相がこのところ盛んに、シュウダンテキジエイケン、と言っているのがすごく気がかり。私のきもちざわざわの、それも一因です。

自分の国が攻撃されていなくても、同盟国が攻撃されたら、または攻撃されそうになったら、軍を出して一緒になってたたかうことができる権利、集団的自衛権。でもそれは、今の憲法のもとでは9条を変えない限り行使できないことのはず。

選挙中、首相は、憲法を変える決まりの96条を変えよう、と言っていたのに、今はもう96条のことは言わず、9条に指もふれずに、法律を手直して、あたらしい憲法解釈とやらで、自衛隊を海外に出せるようにしようとしている。憲法は権力を縛るものであって、国の最高法規。それを無視するなら、それこそが憲法違反だと私には思えます。

3年前、基本的人権のかなめともいえる憲法13条のすばらしさを、ひよんなことから再発見して以来、13条や9条、あわせて96条、97条のことも、簡潔にひとに伝える手だてがないものか、ずっと考えていました。

これまでも、原発やHIV/AIDSのことなど、むずかしいことを私なりにやさしい言葉で、冊子や本とかたちにしてきたことを思えば、憲法に関しても、今が今、そのようにする必要が私にはありそうだなあ。憲法の危機だもの、このまま黙ってはられないよなあ。

そう思えてきたので、ごくごくさやかなモノ、つくります。来号の短信には、それをつくりましたよ！と過去形でお伝えできたらうれしいな。

自著紹介

『紅茶なきもちへコミュニケーションを巡る物語』著:水野スウ 発行:mai works 四六版 200P ¥1,200(税込)

一般書店の取り扱いはありません。送料一冊160円。お問い合わせはこちらまで。

sue-miz@nifty.com

早樫 一男

今年の夏の暑さは大変こたえました。年齢や体力の衰えをひしひしと感じています。

8月末から海外旅行に行く予定になっていますので、締め切りの数日前に原稿を送信するということになりました。私にとっては珍しいことです。

第14号がアップされた頃、多分、ヨーロッパ滞在中かと思います。

ところで、今回から「日本のジェノグラム」として、連載を始めることにしました。身近で話題になる人物やその家族などについて、考えることができればと思っています。

西川 友里

いくつかの学校で福祉系対人援助職養成をしています。

前回の第13号の編集後記で、団先生が「執筆者の多方面での活躍」について書いてらっしゃいましたが、私にも、ちょっとした事件がありました。

ここに書いた文章を見て、ある社会福祉法人の方が研修の講師依頼をくださったのです。打ち合わせの時、その方は過去に私がマガジンで書いた文章をプリントアウトした書類を持ってこられました。その書類には沢山線が引いてあって、付箋もいっぱい付いていて、「ここんとこ大事ですよ」「うちの施設ではここはこうしていい」「これ、うちの職員にも同じようなことがあってね…」等々、お話しくださいました。

14号目にして言ってしまうのですが、実

は私、文章を書くのが苦手です。そんな私にとって、自分が書いた文章に、線を引いて、付箋までつけて、わざわざ持ってきてくださって、思いを述べてくださって…この経験は、ちょっとじーンとしてしまいました。もうほんとに、人によっちゃささいな事と言われるかもしれませんが、私にとっては、とてもとても嬉し出来事なのです。書かせていただいている、良かったです。

中島 弘美

「将来、管理職になりたいわけではないし、お金儲けをしたいわけでもなく、ほどほどが良い」と考えている「学生」が多い。

管理職になりたくないのは、大きな責任を担いたくないし、余分にしんどい思いをしてまで働きたくないと思っているからだ。忙しい生活よりも、自由になるくらいのお金と時間があれば、それで満足なのだろう。

では、先ほどの文章の「学生」の箇所を「働く女性」に置き換えて読み直してみると、どうだろう。

これもまたぴったりくる気がする。学生と同じく、働く女性もそれほど管理職になることを望んでいない。

ただ、結婚をイメージしたとき、できるなら大きな企業に勤めて、しっかり稼ぐ人の「妻」になりたいと思うけれど、自らがそのような働き方をしたいわけではないようだ。



厚生労働省の調査では、総合職で入社した女性も、10年後には65%が結婚や出産をきっかけに辞めていた。男性の29%に比べると大幅に多い数字だ。

学生さんに対しては、「学んだことを活

かして長く仕事を続けていくといいよ」と話しているが、最近では「管理職になってよ。その機会がやってきて、一定のポジションを勧められたら辞退せずに引き受けてね」と声を大きくして伝えている。

義務教育のころは、男女ともに学級委員をしていたし、クラス内では明らかに女子の方がしっかりしていた記憶がある。けれど働きはじめるよりリーダーシップを発揮する女性管理職はまだまだ少ない。

バランスのとれた働き方でキャリアを積むのが難しい状況ではあるけれど、より暮らしやすい豊かな社会になるためにも、どんどん女性管理職が増えてほしいと思っている。

浦田雅夫

ある学会で福島に行く機会があり、福島の人たちからお話をうかがうこともできました。震災後ではなく、復興もなく、現在進行形で被害を受け続けている人たち。私たちは何ができて何ができていないのか、どこにお金を使う必要があるのか、原発のこと、これからの福島のこと。日本のこと。見立てをしっかりとしないと支援につながらない。

坊 隆史

職場の健康診断の結果を見て愕然とした。LDL(悪玉コレステロール)が基準値を上回っていたのだ。視力と器質的なある項目以外は健康そのものだっただけに、今回の結果で自分は成人期の真っ只中にいることを痛感した。

一步大人の階段を上がったと考えよう、と強引にプラスに考え直そうとしたものもやはりどこか悲しい。生活習慣を成人期モードに変えていかなば。

松本 健輔

カウンセリングルーム HummingBird 主宰
<http://www.hummingbird-cr.com>

子どもができてから仕事のペースが明らかに遅くなった。子どもが熱が出たとか特別なことを除いても、子どもの世話にかなりの時間を取られている。子どもが可愛いので満足している一方、仕事をしていな

い不安がつきまとう。趣味の時間も減った。

人生のステージが変わると、いろいろな変化に適応していかないといけないんだということを最近切実に感じる。この変化も楽しまなければ！！

団 士郎

面白い(怪しい)ことを言うおじさんが舌禍事件で顰蹙(ひんしゆく)を買う。「またか・・・」と思われている老害の人もいるし、失脚に近い結果になる人もある。

そんな可能性のある人は「注意してください！」と側近にたしなめられて、サービストークのつもりの与太話はうそぶかなくなる。自肅である。(ただ、自分を大物だと思っている人は、それでも言う。どうせあと僅かだと思っているから自重することもない。あれは別だ)

問題発言は少なくなるかもしれないが、問題認識が変更されるわけではない。何を思っているも、口外しなければ分からない。要するに言わなければ、ばれないという再学習である。建て前と本音なんて、昔、流行った言い回しである。私はそこに、今日社会の脆弱さを感じてしまう。

先日、東京で継続実施しているWSで、最近考えているいろんな話を話した。終了後、主催者・団遊と長年の友人鶴谷さん(共に執筆者)から「今日は、えらく毒舌でしたね」と言われた。

私の自覚の中に、聴衆の中には聞きにくい人もある警鐘のつもりはあった。医療者、臨床心理士、教員、児童相談所職員などが、矛先を向けられていると思ったかもしれない。それは基本的によいことだと思っ

て話していた。憂さ晴らしの放言をしなければならないようなストレスを私は溜め込んではいない。今のような現実を若い世代が自覚の薄いまま黙認していたら、世の中はますます酷いことになる！と訴えたい気持ちでいっぱいだ。

でも、確かに言われるように、結果的には毒舌にしか聞こえていなかったかも知れない。そういう話を聞くのを嫌う時代になっている。みんな良いことばかり言う。

耳に痛いことを言われても、気分が悪いだけで効果はないと思っている。だから、そんな誰の得にもならない話は止めておけと思っている。

ここにはヒューマンサービス世界でよく言われるポジティブ発言、ポジティブ思考の弱点が出ているのではないかと思う。思考はいつも己の言葉遣いの影響を受けている。ポジティブばかりが作り出すものの限界は意識しておかなければいけないだろう。

誰かが言っておかなければ、自分は気づいていたが、誰も言わないので黙っていたと思うことが、みんなの中にドンドン溜まってしまっただろう。

言っておくのは大事なことだ。発言には正しい場合も、間違っている場合も、パランスの悪い場合もあるに違いない。でも、誰も言わないよりはずっと良い。健康な民主主義とはそういうものだ。

正しい事しか言わない事や、思いやりに溢れたことだけを言って生きていこうというのは、誰かの犯す大きな過ちに立ち向かう勇気を欠いていることになる。その結果、沢山の人が不幸な目にあっても、自分にも責任があった事を自覚する道を閉ざしている。

そういう意味で、自分さえ守れていないポジティブトークというのがあるのではないかと思う。



中央法規出版 7 月新刊

「対人援助職のための家族理解入門～家族の構造理論を活かす～」団士郎 著

定価 1680 円

2013年震災復興応援プロジェクトは9月第2週、むつ市図書館のマンガ展からスタートです。9月6日7日は講座・講演もあります。

その後、パネル展は9月30日～10月27日の一ヶ月間、多賀城市立図書館で。

11月は岩手、12月は福島の前定です。詳細は順次確定のモノから。

牛若 孝治

ある日のこと。たまたま乗ったバスの隣の席に老人が座っていた。彼は私を見るなりいきなりこう言った。

「いとこが障害者になった」そう言うなり、彼ははらはらと泣いた。彼にしてみれば、白杖を持った私なら、このような話をしても同情してくれるのでは？という甘い期待を寄せていたのだから。だが、私は彼が描いていたような甘い言葉とは逆に、次のように言い放った。

「あなたが泣くことで、その人の障害が治るとでも思っているのですか！！」一瞬、場が騒然とした。すると、それまではらはらと泣いていた彼は、気を取り直したようにこう言った。「そうですね。あなたのこととおおり。ありがとう」

「障害のある人には障害者の話を」。なんの根拠もないのだが、大体においてこのような傾向が強い。まして、今まで障害のなかった人が、何らかの理由で障害を負った、という場合、本当に辛いのは、現在障害を負っている「その人」であるはずなのに、あたかも話題提供者である自分が辛いような口ぶりで語る人が圧倒的に多い。そこで私はあえて言う。

「その人が障害者になったことで、泣いたり愚痴ったりできるあなたより、現在その障害を現実体験している当人の方がもっと辛いんですよ」

袴田 洋子

先日、3人の「恩人たち」と久しぶりに飲み会をしました。役所の高齢者福祉課のNさん、役所を定年退職した福祉部長のKさん、そして社会福祉協議会のOさん。

介護保険スタート前年の平成11年からですから、もう15年のお付き合いになります。コミュニケーションが恐ろしく下手だった私は、「こういう状況ならば、〇〇すべきですよ？」と正論で彼らをねじ伏せて、役所の人たちを攻め、そうとうに追いつめてきました(ということには、後になってか

ら気がつきました)。でも、このNさん、Kさん、Oさんは、私が来ても嫌な顔ひとつせず、いつも丁寧に話を聞いてくれました。

「よく、あんなコミュニケーションしか出来なかった私を、排除しようと、潰そうとしなかったですねえ、なんで？」と酔った勢いも借りて聞いてみました。彼らは、「まあ、袴田さんの言う事は正論だったからねえ。で、常に、『利用者』の方に向いていたからねえ」と答えてくれました。

正論を言っているも「言い方」が攻撃的であれば、人から距離を置かれることは、よくあることです。なので、Nさん、Kさん、Oさんの彼らこそが、「利用者の方に向いていた」ということになるのではないのでしょうか。

この人たちのおかげで、仕事を続けて来られて、今の私が在ると思っていますが、彼らが、なぜそんなにも愛情を出せる人たちなのか、次回の飲み会で、聞いてみようと思っています。

脇野千恵

◆夏休みとはいえ、教員は毎日のように勤務している。後半によく休みを取り、東北に旅をした。昨年の3月にも出かけたが、東北はやはり遠い。新幹線があるが、津波災害があった海岸線へはとても時間がかかる。今、朝ドラで岩手県の久慈市が注目されているが、ここはもう青森に近い所だ。あちこちで「あまちゃん」を宣伝したコーナーが見られた。テレビの影響は大きいと思うが、ドラマが終わった後はどうなるのかと、要らぬ心配をしてしまった。

宮古市、気仙沼市を見て回り、たくさんのお土産を買ってきた。私に何が出来るのかと考えても思い浮かばない。時間とお金をかけて見た現地の状況を、帰ってきて誰かに伝えることぐらいだろうか。宮古の海岸では、盛岡から来た高校生たちが津波災害跡地を見学していた。県内でも津波を経験していない子どもたちへの学習が実践されているのだと思った。復興は進んでいるようには見えなかったが、更地に咲くひまわりが、何かを語りかけているように思えたのは私だけだろうか。また、

一年後に来ようと思った。



団遊

家族4人で阿蘇へ行きました。夏休み終了ぎりぎりの家族旅行です。阿蘇は、私が小学校6年生、弟が4年生のときに、二人旅で行って以来です。その頃の記憶から、さほど期待もしていなかったのですが、素晴らしい景観と、圧倒的な地形でした。温泉も豊か。蕎麦も美味しい。あの頃は、弟と「ずーっと草やな。はよ終わらんかな」とバスでぶつぶつ言いながら、牧草を食べる牛を見ることだけが唯一の暇つぶし、といった感じだったことを思い返し、「歳を取ったのだな」と思いました。そして、助手席に座る、暇そうな5歳の息子も、きっと同じことを思っているのだろうかと思いました。

www.danasobu.com

乾明紀

今回は、前号で書けなかった前々号の続きを書いた。前号は体調不良で内容を変更したが、今回の執筆も結婚準備と仕事が忙しく、危なかった。ただ、体調不良にならなかったのも、なんとか書けた。それにしても結婚準備って結構大変ですね。でも、嬉しい悲鳴です。

サトウタツヤ

8/30~9/1まで日本質的心理学会を立命館大学で開催。一般公開企画もあるので、ぜひともお出かけください。

日中韓において相互理解を促進するために、それぞれの「人間性に関するキーワード」に関するシンポジウム、もあります(9/1午前中)

9/1の一般公開企画は以下のウェブサイト

<http://jaqp2013.wix.com/jaqp2013#/about1/c201r>

を参照してください。

ついでながら、6月末と8月初旬に福島を訪問。8月下旬には福島県副知事をBKCIに迎えて懇談しました。福島県と立命館大学の協定が結ばれるかもしれません。

大野 睦

屋久島が世界自然遺産に登録されて早20年。ここからがまた大事な時ですが、島内で関係機関と観光業者、住民が大いに議論される機会がないように感じています。

私自身はこの秋に青森、そして香港で屋久島の世界遺産登録から20年について語る機会をいただきました。外からの意見、視点、たくさん吸収して屋久島に還元出来たらなあと思っています。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

